

【椎葉平家村の源氏の平家狩り】について

平家の軍勢は壇ノ浦の戦いにおいて敗れ、かろうじて命が助かった面々は、安泰の地を求めて山深く忍び隠れ、天運を待とうと豊後の国の玖珠の山に分け入った。そこは後に平家山と呼ばれるようになったが、山が浅く、自分達の存在が鎌倉に知れることを恐れ、肥後の国の阿蘇を経て日向の国に迷い入り、そこ(椎葉)の山中で過ごしていた。

しばらく経った頃、源氏の大将・源頼朝は屋島の戦いでその弓で平家の軍勢を恐れさせたことで知られた那須与一を呼び、【平家の残党を一人たりとも生かしておいてはならぬ。西国に向けて出立せよ】と出陣を命じた。

このとき与一は屋島の戦いのあとに体調を悪くしていたので、頼朝の許しを得て、弟の大八郎(22歳)を九州に向けて即刻出陣させた。

海陸を経て九州に下り、平家の残党の居場所を尋ねながら、肥後の国の阿蘇から日向の国の境へと来ると、山が険しくなって馬も通れないようになったので、仕方なく馬を乗り捨てて山を登ることになった。このとき大八郎が鞍を置き去ったことにより、この地のことを誰言うことなく鞍置村と呼ぶようになった。

その後、いつとはなく鞍岡村と変わった。それは元久2年のことであったが、大八郎率いる軍勢は険しい山々をよじ登るように登りながら進んだ。

落ち延びた平家の残党は日向と肥後の国境付近の深い山里の民家に隠れ、椎や檜の実を拾い、また鳥や獣を獲って命をつなぎ、また、山を開墾して畑をつくり、作物を育て、ほそぼそと生活を営んでいた。

椎葉山とは、大八郎がしばらく陣小屋を営んだ折り、椎の葉をもって屋根を葺き風雨をしのいだことから付いた名で、那須大八郎の名をとって那須山とも呼んだ。大八郎は、椎葉へ入山以来3年の年月を経ていたが、この間、平家の残党はこの山深い地域に散在してはいたものの再挙の見込みは全くなく、ただ日々畑を耕して作物を作るなどして暮らしを続けるのみであったので、これを討つことは忍び難いものであった。

それどころか、大八郎は平家の残党のために、平氏がその守護神として崇拜する巖島神社を、上椎葉に勧進(かんじん:信仰に入らせること。寺社・仏像をなどの造立のために寄付をあつめること。)し、造営しました。

いよいよ鎌倉の命によって大八郎は帰国することになったが、そのときの召使いの侍女・鶴富は大八郎の寵愛を受け懐胎していた。

大八郎は、男子なら我が本国である下野の国へ連れて参れ、女子であればこの地で暮らせと言ひ、親子の証拠にせよと天国の太刀(たち)に系図を添えて渡した。

大八郎の帰国後、鶴富からは女子が誕生した。鶴富は那須の血脈を大切に思い、娘に婿をもらい、那須を名乗らせた。

その後椎葉は、代々その末裔(まつえい)が支配したと言う。